

シンポジウム

実践報告「縛らない看護」

Nursing not to Restrict

福本 京子 Kyoko Fukumoto (医療法人笠松会有吉病院)

キーワード：身体拘束，ユニットケア

key words : medical restraint, unit care

1. はじめに

医療法人笠松会有吉病院は福岡県宮若市で地域医療を支える慢性期療養型医療施設である。1998年「抑制廃止福岡宣言」を宣言し、5つの基本的ケアの充実を図りながら身体拘束廃止に取り組み、2002年には医療施設では全国発となるユニットケアを導入し、環境も看護（ケア）の味方にしながら、現在も縛らない看護を実践している。

19年に及ぶ実践の中から、縛らない看護実現のためのキーワードについて報告する。

II. 縛らない看護（ケア）実現のキーワード

身体拘束廃止が目指したものは、『高齢者の尊厳の保持』である。問題行動の原因を探り、個別のリズムに合わせたこちよいケアと環境を調整することで、問題となる原因を取り除き、縛らない看護は継続できる。

縛らない看護（ケア）を実現するためのキーワードは以下の通り。

1. 五つの基本的ケアを徹底する

“起きる・食事・排泄・清潔・アクティビティ”の持っている力を探し、できない原因を探り、できるケアに変えること。

五つの基本的ケア（図1）とは、起きる・食事・排泄・清潔・アクティビティである。要介護状態の高齢者を車イス等で可能な限り起きてもらい、よい姿勢で食事を摂り、よい姿勢で排泄する。起きるという行為は、食事ケアや排泄ケアを提供する前の重要な準備で、嚥下や排泄の一連のメカニズムを考えると、重要

な姿勢であることはいうまでもないが、単にADLだけではない。五感を刺激することで意欲をひきだし、高齢者の心が起きると身体も動くのである。

1) “起きて、食べる”を支える

しっかりとよい姿勢で起きること。よい姿勢で高齢者個々のペースに合わせて食事を摂ることで脱水は改善される。食のアセスメントは多職種で実施し、姿勢保持のための用具（テーブルやイス、車イスなど）や自助具、食形態等を検討する。食べる意欲をこちよく刺激するには、嗜好や習慣を継続するケア方法であること、そしてまるで自宅のキッチンと思えるような食堂、気の合った高齢者同士のグルーピングなどの環境調整も重要である。

2) 排泄を支える

排泄も個別のリズムに合わせたトイレ誘導やオムツ交換を促すことにより、汚染やろう便といった不潔行為も予防できる。居室内のトイレを活用すれば、失敗を人の目にさらすことなくプライバシーも尊厳も守ることができる。排泄の問題は高齢者自身が何を問題と

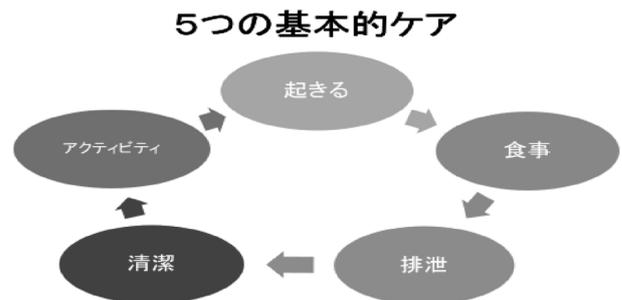


図1

し、どのような排泄ケアを望んでいるのか、潤いのある生活を支えるための排泄ケアであることを念頭に置いている。

3) 入浴を支える

入浴により保清で清潔は保持され、皮膚トラブルや褥瘡予防となるのはもちろんだが、個浴で時間や湯の温度は意向に合わせ、音楽を流すなど、入浴が楽しみになる配慮も忘れない。ユニット病棟において昨年は30名が老衰による死亡退院であったが、褥瘡発生は死亡日より2週間以内の発生が3名のみになり、他は褥瘡のないきれいな身体のままでの退院が実現できた。

2. 家族と環境をケアの味方にする

落ち着いた環境・居場所を作り、家族もパートナーにすること。

図2,3のように、単に一人部屋があればいいのではなく、写真や思い出の品々などの私物で身の置き所=居場所へと設えていく。輝いていた頃の写真は、これまでの生き様を想像させ『その人なり』に考えるのである。処遇の場から生活の場となり、個人としての生活環境を再構築することで生命力は萎むことなく、自己再生の場となる。生きる力を引き出す環境の持つ力は大きい。

3. ケアを検証すること

ケアをふりかえり、チームの成果と課題を確認すること。

時に実践は、高齢者には押し付けとなっていることもあり、実践を検証することで気づきを得ることがある。

- ①高齢者のこれまでの生き様を知り、“その人なり”を想像できたか
- ②人の手を借りながら、生きるということを理解できたか
- ③私たちのケアが生きる力を引き出し、尊厳を守ることができたか
- ④よい結果であってもそうでない場合でも、真摯に向き合えたか
- ⑤実践を通じて得た喜び・やりがい・葛藤をすべて価値にしているか



図2



図3

III. まとめ

施設に入所することについて、外山義氏は「第一の苦難は施設入る原因そのものによる苦しみ、第二の苦難は、みずからがコントロールしてきた居住環境システムの喪失、第三の苦難は施設という非日常空間に移ることにより味わうさまざまな『落差』に直面し、さらに苦しむことになる。地域で暮らしてきた高齢者が、生活の場を施設に移したとき経験させられる生活の『落差』—『空間』の落差、『時間』の落差、『規則』の落差、『言葉』の落差があり、最大の落差は『役割の喪失』である。」と述べている。

基本的ケアを整え、これまでの生活環境を継続することは最も重要と考える。

文献

外山義 (2013). 自宅でない在宅—高齢者の生活空間. 東京：医学書院.